

## 特定地域と年代をはなれて

栗 田 和 明

A氏は現在住んでいるB村から数キロはなれた村で一九一九年に生まれた。今年、八三歳になる。非常に元気で、時には農作業もおこなう。さすがに鋤を持つての作業はしないが、小さな鎌で雑草をかきとったり、Cの実を少しずつ集めたりする。

A氏は、村人の中では身長が高く、遠くからも目立つ。性格は温和で、小グループのまとめ役にはよくなっている。しかし、それ以上大きな権力や利益を得ようとしたこともなく、つましく穏やかに生活している。したがって生活は楽ではなく、子どもたちが時には援助している。

長女は、奨学金を得て看護婦の資格を取り、いまはDで夫とともに働いている。不定期ではあるが、彼女からの仕送りがA氏の貴重な現金収入になっている。長男は、国立の訓練校で自動車整備の技術を身に付け、大会社の自動車整備部門に就職して安定した生活を送っていた。ところが解雇の憂き目にあい、その後の再就職が進まず、すでに三年以上を経過している。解雇のきっかけは、職場での盗難の犯人と疑われたためであるが、真相はよく分からない。

A氏は生まれてからすぐに、家族とともに近くの他の村に移り、その小学校に入った。当時としては

特定の地域と年代をはなれて（栗田）

珍しかったキリスト教会の援助で設立された小学校であった。彼はいまでもキリスト教徒であるが、熱心ではない。人に尋ねられれば「キリスト教徒である」と答えるだけで、教会に通う姿を見たことはない。

一九四〇～一九四五年は兵士として過ごした。はじめは一兵卒としてE、F、Gを転戦したが、実際の戦闘には立ち会っていない。次第に狙撃の腕を上げ、新兵の教育を担当する役についていった。実際の戦闘に立ち会っていないせいか、軍隊生活の厳しさと残酷さを語るよりも、衣類、タバコが支給されていたことを懐かしんだりしている。

退役してからはHの大農場の倉庫番をしばらく勤め、ここで二度目の結婚をしている。はじめの結婚はすぐに破綻したようだ。

一九五一年に郷里に戻って家を構える。そして、一九六〇年代、一九七〇年代に三度目、四度目の結婚をし、現在は、二番目と四番目の妻と暮らしている。

ここまで書くと、読者は「これは日本の話ではない」と気づくだろう。意図的に地名は伏せていたが、それぞれ、以下のように対応する。

B ルゴンボ（タンザニア内）

C コーヒー、あるいはカルダモン

D ボツワナ

E ケニア

F エチオピア

G マダガスカル

H コングウェ（タンザニア内）

A氏の生活を紹介したのは、地名をはずせば、多くの地域で同様な生活があったと思うからだ。A氏が住む地域では（アフリカの大部分の地域でも同様であるが）、複数の妻を持つものは少数派で、既婚男性一人当たりの妻の数は一・三人である。複数の妻を持つ者は既婚男性の四分の一程度である。したがって、A氏ではなく、他の多くの方の例を取れば、日本以外の話だと露見しないで、もう少し記述が続けられただろう。

前記のA氏のライフヒストリーには、年代が記してあるが、これを伏せるとさらに一般的な、いつでもどこにでも展開できそうな話になる。

これをもって、時と所を特定することの重要性を強調することもできるだろう。しかし、私は、時と所にかかわりのない物語のほうに惹かれている。

アフリカ大陸の東を、南北にアフリカ大地溝帯（グレイト・リフト・バレー）が走っている。長さは、最長にとれば五千キロメートルに及び、幅は百キロメートル以内である。この細長い溝に湖ができていて、アフリカ大陸の東には、南北に長い湖が、一列に並んでいる。目立つところでは、アルバート、エドワード、タンガニーカ、ルークワ、マラウイの各湖だ。この地溝帯は現在も活動しているので、火山、温泉、火山ガス、などをこの地域で観察できる。

湖は、周辺から注ぎ込む川が運ぶ土砂ですぐに埋まり、一般には数万年の寿命しかない。日本の琵琶湖のように百万年の移動が追えるものは例外である。アフリカ大地溝帯は広がりつつあるので、湖には川と

特定の地域と年代をはなれて（栗田）

土砂が注ぐのにも関わらず、数百万年にわたって埋まらずに、その形をとどめている。

ここは人類の進化の舞台でもある。したがって、今、私たちが大地溝帯の湖のほとりに立って眺める景色を、数百万年前の人も眺めていたことは確かだろう。人手による変形を繰り返してきた人口集中地の川や海岸線、たとえば東京湾、に臨んだ時とは違う感慨をアフリカ東部では味わうことができる。

これは、時にかかわりがない物語、であろうか。かかわりがないのではなく、時による変化がわずかであるだけのようだ。大地溝帯に臨んでも、その人々が食べているバナナは、最近数百年のもので、そこに住む民族は二〇世紀になってから移住してきた人であつたりするのだ。

個別の地名、年代をすっかり忘れて、個々の人生が区別できないような物語はあるだろうか。そもそも、こんなことを考えているのは個別の地に住む「私」にほかならないので、私の願望も夢想到終わるのかもしれない。

地域と年代を離れることができず、個別の地域で自分の時代を生活している人ができる事は、他地域、他時代との共感を結ぶことだろう。この能力には人によって差があり、その違いの大きさに驚くこともある。人は個別の生を生きた後、最終にその個別性へも終止符が打たれる。死後にも個別性を求める手を打つか、あるいは個別を離れてよしとするか、興味深い。

A氏のところでは、死者が出ると盛大に、人目もはばからずに泣いて悲しむ。悲しみを表現している期間も数ヶ月に及ぶことがある。「墓」と言うべきものはいたつて粗末で、単なる穴である。埋めた場所の目印として小さな石を置くことがあるが、これは大きな意味はない。埋葬後しばらくしてから、その石につまづいて転がしてしまっても、とくに直さない。その石が誰のものであるかは、死者の兄弟、子どもが生きていれば記憶している。といつてもそこに参るような事もない。そもそも、彼らは頻繁に移動し、畑や屋敷地も交換してしまう。遺体はこんな畑や屋敷地内に埋葬されているのだ。他の家族がそこに住み始めたなら、どれが埋葬場所を示す石か不詳になってしまうのである。

A氏とその周辺の方々と付き合い始めてからすでに二〇年近くがたつ。その間に亡くなった方も多い。私の撮った写真の中にその姿が残っているが、ほとんど忘れ去られた人もいる。そして、私のフィルムも次第に色あせてくる。温度・湿度を管理したフィルム庫に入れてあつても褪色は不可避だ。この褪色を逃れるべく、デジタル化してCDに焼いた。しかし、CDも次第に色素層に気泡が入って読み取り不可能になるらしい。一〇年程度でDVDに焼きなおす手もあるが、そこまで手をかけて彼らの鬼籍を守るべきかどうか、迷っている。忘却するのも、また一つの方法であろうか。

(立教大学文学部史学科教授)